

前橋文学館特別企画展 萩原葉子生誕百年記念 図録別冊

わたしはまだ踊らない

作 加藤真史

本作は前橋文学館の委嘱により上梓され、

前橋文学館リーディングシアター<COMIX>として2020年9月20日に同館ホールにて上演された。

登場人物

ヨウコ F 37・39・40歳
ヤマギシ M 53・・・56歳
マリ F・・・56・・・歳
ムロウ M・・・68・69歳

【凡例】

- ☆ 同じ数の台詞をほぼ同時に言う
- ★ 前の台詞に重なって言う
- ／ あとの台詞に断ち切られる
- 入場しながら言う
- 退場しながら言う
- ◎ 舞台にいないまま言う
- ・ 個／秒あける

1. 驟雨

【舞台】

ヨウコの暮らす一軒家である。

下手に玄関、木枠ガラス格子の引き違い戸であり、ガラス模様は『銀河』、内側からネジ締めり錠がかけてある。まだ新しいが建付けは必ずしも良くない。半畳ほどの三和土があり、三尺幅の廊下を挟んで四畳半ほどの畳敷きの居室。廊下の奥には便所ともう一間あるが客席からは見えず、ただ動線のみが確保されている。居室の上手に台所があり、流しと小さい水屋箆筒が置かれている。居室の中央にセパレート式のソファベッドがソファ形状で向かい合って置かれ、その間に折り畳み式のテーブルがある。隅には足踏み式のミシンがあり、その横に小さな引き出し式三段整理棚、その上には黒いランドセルが置かれている。

1957年早春

夜。

暗い日曜日。

日没前から降り出した強い雨は小止みになり、湿気を含んだ空気は遠くからカエルの重い鳴き声を運んでくる。

時折、軒先から雨のしずくがパラパラと落ちる音が聞こえる。

部屋の中ではミシンを踏む音がする。

玄関の戸を叩く音。

(ドンドンドン・ドンドンドン・ドンドンドン・ドンドンドン・ドンドンドン・ドンドンドン)

ヨウコ 奥に入っていないさ

襖を開める音

溶明

裸電球の光が夜の部屋に強いコントラストをつくる。

(ドンドンドン・ドンドンドン)

ヨウコ、ミシンの前に座って玄関の方を見ながら不安げな表情で身を固めている。

ヤマギシ ◎ゴメン

(ドンドンドン)

ヤマギシ ◎ここは、萩原朔太郎の娘の住む家か

(ドンドンドン)

ヨウコは足音を忍はせて玄関に近づき、外の様子をうかがう。

ヤマギシ ◎はやく開ける

(ドンドン)

ヤマギシ ◎俺は、ヤマギシガイシだ

(ドンドンドン)

ヤマギシ ◎ (叩きながら) おーい、いつまで人を

ヨウコ、壁のスイッチをそっと上げて外玄関の明かりをつける。

玄関を叩く音が止む。

玄関ガラスに外の人影、ユラユラと不規則に揺れている。

ヨウコ、様子を見ながらカギを緩め、引き戸をそっと開けようとすが、その刹那ヤマギシが外から手を掛け勢いよく開ける。大きな音にヤマギシ一瞬凝固し、やがて視線をヨウコに向ける。

ヨウコ、ヤマギシと目があう。

ヤマギシ、引き戸に手を掛けたまま前後に揺れている。顔が赤い。酔っているようである。

ヨウコ あのだ：

ヤマギシ あなたが、萩原朔太郎の娘か

ヨウコ あ、はい

ヤマギシ うむ、父上の面影がある

ヨウコ え、あ：

ヤマギシ 似ているな

ヨウコ あ、はい

ヤマギシ ヤマギシガイシだ、ご存知か

ヨウコ え、ええ

ヤマギシ 上がらせてもらいますよ

ヨウコ え、あ、はい：あ、ちよっと

ヤマギシ、ヨウコが言い終わらないうちに上がり込む

ヤマギシ いい家だ。

ソファの前で席を見比べ、上手のソファにドツカと腰掛ながら

ヤマギシ 敗戦の焼け跡から目覚めた人民の暮らす場所だ。

ヨウコ、所在がない

ヤマギシ、その様子を見てやや声を潜めるように

ヤマギシ 酒はありませんか？

ヨウコ はい？

ヤマギシ 酒です。飲む、酒

ヨウコ あ、生憎…

ヤマギシ いや、料理酒でもなんでも結構なんだが

ヨウコ すいません、本当にうちには

ヤマギシ そうですか

ヨウコ はい

ヤマギシ うん…いや、しかし、(急に大きな声で) 萩原朔太郎の娘

の家なのに、酒の一本もないのかね

今は…飲む者がおりませんので

ヤマギシ ああ…聞いている

ヨウコ え？

ヤマギシ あ、いや、あなたの、離婚のことは、聞いていると

ヨウコ そうですか…あ、こちらへ

ヨウコ、下手のソファをすすめる

ヤマギシ ん、あ、そう、そうかね

ヤマギシ、下手ソファに座り直す

ヨウコ、台所へ行き水屋箒筒から矢筈模様のコップを一つ出し水道から水を注いで盆にのせる。

ヤマギシ お父上とは、「四季」の同人だった。

ヨウコ、盆に乗せてきたコップをヤマギシの前に置く。

ヨウコ どうぞ

ヤマギシ あ、ああ…

ヨウコ、黙ってヤマギシの向かいに腰掛ける

ヤマギシ ホリタツオが主宰したのだ。お父上には創刊号の巻頭言

を書いていただいた。

ヨウコ、黙ったまま頷きヤマギシを見る。

ヤマギシ ぼくの『人間キリスト記』を透谷文学賞に選んでいただいた。それに「日本浪漫派」でも…

ヨウコ、黙ってヤマギシを見つめている

ヤマギシ ミヨシさんに聞いたのだ。

ヨウコ え？

ヤマギシ ミヨシさんだ。先だって、あるバーでお目にかかった。

ヨウコ はあ

ヤマギシ お父上が亡くなった後、あなたが困窮されたことも、離婚
なすったことも

ヨウコ ええ

ヤマギシ あなたの生活をずいぶん心配しておられたようだが…
わかっているかね

ヨウコ はい

ヤマギシ ミヨシ…タツジさん、ですよ

ヨウコ ええ、父の親しい友人でしたし、一時は叔母とも連れ添っ
ていました

ヤマギシ うむ、そのミヨシさんだ、ミヨシさんはお目にかかるたび、
お父上の話をしては…いや！それはどうでもいい。

ヨウコ …

ヤマギシ 今日、君に用があつて来たのだ。

ヨウコ 私に…

ヤマギシ そうだ

ヨウコ ご用向きは、なんでしょう

ヤマギシ 「青い花」を復刊する。

ヨウコ え？

ヤマギシ 「青い花」だ。昭和九年にダザイやダンカズオとつくった。

ヨウコ それは、雑誌ですか？

ヤマギシ そうだ、同人雑誌。文芸誌だ、既に同人も集めている。

ヨウコ はあ

ヤマギシ 以前のものは一号出した後、「日本浪曼派」に合流した。
保田與重郎らの…保田は、ご存知か？

ヨウコ ええ、保田さんにはお目にかかったことがあります。

ヤマギシ よろしい。うむ、それで、これは、云わば出直しだ。

ヨウコ はい…え…それで、私に／

ヤマギシ 君を、誘いに来たのだ。

ヨウコ え？

ヤマギシ 君に書いてもらいたい。

ヨウコ !

ヤマギシ 君に／

ヨウコ ・詩など、書けません！

ヤマギシ いや／

ヨウコ 無理です！絶対無理です！

ヨウコ ……

ヤマギシ いや、なにも詩を書けと言っているわけではない

ヨウコ …

ヤマギシ 短いもので良いのだ

ヨウコ ダメです。

ヤマギシ ……

ヤマギシ …／

ヨウコ 詩人の娘を背負ってきたんです、ずっと。

ヤマギシ うむ

父が母と別れて、前橋の小学校に転校した時だって、担任
教師から「この人の父親は詩人だから詩と国語がうまい
はずだ、皆も負けないように」なんて言っつて紹介されたん
です。どこへ行つても「朔太郎の娘」「詩人の娘」と呼ば
れて、父親が詩人だから、詩がうまくて、国語が出来て、
成績が良くてはと、ずっとそれを背負ってきたんで
す。詩人だったのは父です。萩原朔太郎です。私は…違
います。ダメです。

ヨウコ、絶句する。

ヤマギシ、置かれたコップを静かに手にして、水を半分ほど飲み、大きく息を吐く

ヨウコ ダメなんです…

ヤマギシ 萩原朔太郎が嫌いか？

ヨウコ え？

ヤマギシ お父上が、嫌いなのかと聞いたのだ。

ヨウコ 父は…

ヤマギシ お父上は

ヨウコ やさしい人でした

ヤマギシ …うむ

ヨウコ 今わの際まで、わたしを守ろうとしてくれました。

ヤマギシ そうかね

ヤマギシ、残った半分の水を飲み干す

ヤマギシ では書ける。

ヨウコ え…

ヤマギシ モリマリを知っているかね

ヨウコ モリ…マリさん？

ヤマギシ そうだ、鷗外漁史森林太郎の娘

ヨウコ ああ…

ヤマギシ 知っているか

ヨウコ ええ、なにか、お父様のことを書かれたエッセイを出版さ

れたと

ヤマギシ そうだ、

ヨウコ それが…

ヤマギシ 文豪・森鷗外の娘が描くその実像を皆が興味を持って読んでいます。

ヨウコ 実像…

ヤマギシ 鷗外と一緒に帽子を買いに行った際の話を書いていた。

鷗外は、人並外れて頭が大きいのだそう。それで、似合う帽子を選ぶのに手間取ったとか

ヨウコ まあ…

ヤマギシ 父と娘の絶対光景だな、それは

ヨウコ 絶対光景？

ヤマギシ 何人にも侵し難い父と娘、二人だけの領域

ヨウコ 二人だけの…

ヤマギシ 君にも、有ったのではないかね

ヨウコ はい？

ヤマギシ そんな、父と娘の絶対光景と呼ぶべきものが

ヨウコ ……

ヤマギシ モリマリはこうも書いている。鷗外は学問や芸術に対して、山の頂を極める人のような、きれいな熱情を持っていた、と

ヨウコ きれいな熱情

ヤマギシ 鷗外の娘が書くのだ、どんな評伝よりも、どんな献辞よりも、それは実像に近いのではないかね

ヨウコ 娘が書く

ヤマギシ そうだ。娘が書いたのだ。どうだね、朔太郎の思い出を、

君が書いてはどうかね

ヨウコ
わたしが

ヤマギシ
君が知っている萩原朔太郎を

ヨウコ
私が知っている萩原朔太郎を

ヤマギシ
軽いエッセイでも、小説でも、何でも構わん

ヨウコ
私だけが知っている萩原朔太郎を

ヤマギシ
君が、君自身の言葉で書くのだ

ヨウコ
わたしの言葉

ヤマギシ
父上への愛一筋で書け。君なら、書ける

ヨウコ
…

ヤマギシ
必ず出来る。書いてみなさい。

ヨウコ、答えない

ヤマギシ、立ち上がる

ヤマギシ
酔った勢いで、ここまで来てしまったが、よかった。

ヨウコ、ヤマギシを見る

ヤマギシ
来てよかった。ぼくも、ダサイオサムのことを書いてみよう。君も、必ず書いてみなさい。

ヨウコ、視線を外す

ヤマギシ
ぼくの家は踏切の向こうだ。集まりの日は追って連絡する。必ず書いて、持ってきてみなさい。

ヤマギシ、退場

ヨウコ、ぐったりとしてしばらく動けない。

「だいじょうぶ？」

ヨウコ
わからない…ただ、目が回ってしまって、手が、震えてしまつて…

「今の人、誰？」

ヨウコ、説明する気力を失っている。

暫くして、這うように整理棚まで行き、大学ノートと数枚の蕪半紙、そして先の丸くなった鉛筆を出してくる。

ノートと蕪半紙をテーブルに広げ、小さなボンナイフで鉛筆を削り始める。

ヨウコ
必ず書ける、なんて、無責任な言い方…何が書けるっていうの、私に…萩原朔太郎のこと…父親の思い出？…例えば…お父様の、本棚…「みだれ髪」「二握の砂」「邪宗門」「若菜集」「正義の兜」…「煙草と悪魔」「不思議の国のアリス」「ガリア戦記」「人間椅子」「パノラマ島奇譚」…ギターを弾いたり、マンドリンも弾いたり、晩酌のお付き合いいましたな、ご飯こぼす癖だとか…手品の話とか、お客様のこととか、代田の家のこと、前橋のこと、お母様の恋の話、お母様とお別れのこと…

溶暗

2. 風花

明転

1959

晩秋、遅い午後

下手ソファにマリ。生成りのタートルネックセーターの上に緋色のクルーネックカーディガンを羽織っている。毛織のスカートにハイソックス。かご編みのバッグを脇に置いている。

台所にヨウコ。ツイードのセットアップ。お盆に水の入ったコップと湯呑がそれぞれ一つと台布巾。

ヨウコ、マリにコップ、自分に湯呑を置きながら

マリ、おっとりとした口調で話をしている

マリ ハナモリさんの悔しがる顔が目には浮かぶわ

ヨウコ 悔しがるかしら

マリ 悔しがりますとも

ヨウコ あら、なぜ？

マリ ハナモリさん、トイタさんのお仕事で歌舞伎のご本の装幀をなすったこともあるのよ。それだから、団十郎や幸四郎なんかは、とてもお好きなの

ヨウコ そうなの？

マリ ええ、それに今は中車ね。太閤記の光秀がとても素晴らしかったって、いつも仰ってるの

ヨウコ 今日も出てらしたかしら？

マリ 出てらしたわよ

ヨウコ どのかた？

マリ ヨシオカゴンダユウだったかたよ

ヨウコ ああ、ちよつと細身の、うりざね顔の

マリ そうそう

ヨウコ 立花屋さん

マリ え、なに？

ヨウコ ユキチに啖呵切るところで、大向こうから声がかかったわ、立花屋！つて

マリ そうなの？

ヨウコ マリさん、聴こえなかった？

マリ わたし、ダメなの。舞台とか見ていると、ほかの声とか聞

こえなくなっちゃうのよ

ヨウコ 夢中になってらしたもの

マリ でしょう、だつて綺麗だったじゃない、染五郎さん

ヨウコ あら、そつちを見てらしたの？

マリ 今日は顔見世程度だけど、素敵なのよ、十代歌舞伎

ヨウコ 市川染五郎、市川團子、あと…中村萬之助

マリ そう

ヨウコ 團子の芸が一番達者だつて

マリ そうなの？

ヨウコ あら、ハナモリさんが仰っていたんじゃないか？

マリ そうだったかしら

ヨウコ やだ、マリさんにかがったのよ

マリ あら

マリ それで、わたし、今日は團子ばかり見ていたのどのかた？

ヨウコ やだ、マリさん、染五郎さんと一緒に「狼狽えるな！文明

人としてふるまえ」って叱られていた方よ。

マリ あら、じゃあ、「戦いの火ぶたが迫っていて授業どころではありせん」っておっしゃった方？

ヨウコ そう、そうよ

マリ あら、やだ

二人、快活に少し笑う

ヨウコ だけど、あれね、わたし歌舞伎って、助六とか勧進帳とか、

そういうものなんだと思ってたわ

マリ 白波五人男とか

ヨウコ 知らざあ言って聞かせやしよう

マリ 弁天小僧好きよ

ヨウコ 一緒に住んでいた前橋の祖母もね、好きだったみたい

マリ そうなの

ヨウコ でも、今日のは福沢諭吉と慶應義塾のお話でしょ

マリ そうね

ヨウコ 歌舞伎…なんだけど、お話は新劇みたいだったわ

マリ ええ、そうね

ヨウコ そうでしょ

マリ でも、そういうものなんじゃないかしら

ヨウコ え？

マリ だって、江戸時代には現代劇でしょ、歌舞伎って

ヨウコ あ、そうね、そうよね

マリ いいお芝居は何度も演じられるから、時代もどんどん古

ヨウコ くなっちゃうのね

ヨウコ そういものなのね

マリ そういものなのよ

再び笑う

ヨウコ あ、ごめんなさい、切らしちゃってて

マリ あ、いいのいいの

ヨウコ ムロウさんのお宅ならこんなことはないでしょうけど
マリ アサコさんが、具合悪くていらっしやれなかったんです

もの、仕方ないわ

ヨウコ だけど、お水じゃあ

マリ わたし日本のお茶苦手なのよ

ヨウコ 紅茶用のポットも揃えようかしら

マリ 素敵ね

ヨウコ 昔はあったのよ、うちにも

マリ ええ…

ヨウコ …紅茶ももっと簡単に淹れられるようになるといいんだ
マリ けど…
ヨウコ 今度、わたしの好きなの持ってきてあげると
マリ 本当？

ヨウコ 黄色い缶の紅茶、ご存知？

マリ あ、知ってるわ

ヨウコ わたし、あれが一番好きなの、ほら、缶を開けたときにパ

ツとお部屋中に華やかな香りが拡がるでしょう、それを

ヨウコ ふたさじよ。ふたさじポットに入れてね、注ぐお湯は薬缶

の口からお湯が繩のようになってほとぼしって、辺りに飛び散る位の熱いのがいいのよ。パップは、そんな紅茶をご飯の上に乗せたおまんじゅうに注いで「あんこ茶漬け」を…

マリ、話に夢中になってしまいコップを倒す
ビツクリして動けない

ヨウコ あら、たいへん

マリ ……

ヨウコ 大丈夫？マリさん

マリ ごめんなさい

ヨウコ お洋服、濡れてない？

マリ ええ…

ヨウコ 良かった

ヨウコ、手早く台布巾で水を処理しコップを手にして台所へ
布巾を絞って、戻ってくる

マリ ごめんなさい

ヨウコ いいのよ、気になさらないで

マリ ……

ヨウコ マリさんの、お父様は、お芝居好きだったの？

マリ え？

ヨウコ ほら、日本の古いお話をもとに小説とかお書きになって
いたし

マリ ああ、きつとご覧になっていらしたと思うわ

ヨウコ 新劇は？

マリ オサナイカオルさんとは、お話ししていらしたみたい。ゲ
ーテとか、イプセンとか

ヨウコ 書いたりは

マリ 「生田川」かしら

ヨウコ 書いてらしたのね

マリ 大抵のことはなすっていたわ。何でも出来てしまう方だ
ったから

ヨウコ ええ

マリ あ、そうそう、パップと言えば、こんなお話し出したわ

ヨウコ 何かしら？

マリ ナツメさんのお葬式の際にね、受付にいらした若い方に
名刺をお渡ししたんですって、とても凛々しくて清々し
い青年だったとおっしゃっていて、詩人の匂いがしたっ
て

ヨウコ ナツメさんって…

マリ 夏目漱石さんよ

ヨウコ お友達だったの？

マリ それは知らないけど

ヨウコ 知らない人のお葬式は行かないわ

マリ そうね、でもナツメさんのことは、皆さんご存知でしょ

ヨウコ そうだけど

マリ ナツメさんのお住まいが借家で、もとはパップが住んで

ヨウコ いらしたところだったのですって

マリ だいぶ親しいのじゃないかしら？

ヨウコ

マリ あ、それで、その受付の方よ

ヨウコ ああ、ああ

マリ 凛々しくて、清々しい青年

ヨウコ ええ

マリ アナタのお父様ではない？

ヨウコ え？

マリ 日に灼けて精悍だったと言っていたわ

ヨウコ まあ、色は黒かったけど…

マリ きっとそうよ

ヨウコ そうなのかしら

マリ パッパの蔵書の中に『月に吠える』があったの

ヨウコ 本当！？

マリ ええ、萩原君より献呈って書いてあったわ

ヨウコ 父の本です

マリ でしょう。パッパに贈ったのよ、ご本。ナツメさんが亡く

なった翌年に出されたのだから、その名刺を頼りに出し

たのではないかしら

ヨウコ そうなのかしら

マリ きっとそうよ、だから私たちも、お父様の時代からのお友

達なんだわ

呼び鈴が鳴る

ヨウコ あ、はい。(マリに)ごめんなさい。

マリ いいわよ

ムロウ ◎ムロウです。

二人 あ！(二人顔を見合わせ微笑む)

ヨウコ、玄關に行き戸を開ける。

マリ、そそくさと身なりを整える。

ムロウ、和装にソフト帽。白い襟巻と外套を羽織っている。手には紙包み。

いらつしやい、どうぞ上がってください。

いや、近くに来る用事があったもんでね。これ、サクミくん(紙包みを手渡す)

あら、何かしら

今川焼、玉川屋の

まあ、喜びます。あら、あったかい(受け取って台所へ)

まだ、焼き立てだから(マリに気付いて)おや

お邪魔しております(上手ソファに移動する)

いや、今日は、アサコが失礼をしたね(ヨウコ、戻って脱

いだソフト帽と外套などを受け取る)

失礼だなんて、そんな

歌舞伎は、二人で？

ええ(受け取った外套をハンガーにかけ乍ら)

お綺麗でしたのよ、染五郎さん

そうかね

ええ、目元涼やかで

いずれ松本幸四郎を継ぐ役者だ、期待してしまうね。伝統と格式の中で潰されなきやいいが…ヨウコも染五郎かい

(マリの向かいに腰掛ける)

ヨウコ わたしは、團子ですね。(お茶の用意を運んでくる)

ムロウ ほう、どんなところがいいんだね

ヨウコ ちよつと芯をずらしてくる感じがして…あれは、芸も達

者なんだけど、人間性かしらって

ムロウ なるほど、あれはいい感じでクルイがある。狂気、と呼ん

でもいいか。

狂気？

ムロウ 本流・王道ではない部分での革新性とかね、祖父さんの猿

之助はロシアバレエの演出を取り入れたりしているし、

まあ、そういう新しいものを取り入れるのと古典復興、ル

ネサンスの気風というか…ま、そういう家風なんだろう

ね。

マリ ムロウさんは、いかがです

ムロウ なんだね

マリ 十代歌舞伎、どなたがお好き

ムロウ そうだねえ、うむ、強いて言えば…萬之助かな

マリ あら、どうして？

ムロウ 歳は若いからね、養子に出て、中村吉右衛門を継ぐことにな

る。その、背負っているものがね、重いのが面白いのさ。

マリ ふうん、

ムロウ なんだね？

マリ ちよつと、意地悪ではないかしら

ムロウ ええっ？

マリ 素直に、視えているものを楽しんであげたらいいのに、背

負っているものを、なんて、ちよつといじわるだわ。

ムロウ おいおい、こりや、こまったね

三人、少し笑う

ヨウコ ところで、アサコさん、お加減はいかがです

ムロウ なに、ただの風邪だと思っただがね、ほら、少し冷えてき

たから

マリ 秋ももう終わりますもの

ムロウ うむ、風花が舞っていたよ、来る途中

ヨウコ まあ、じゃあ、そろそろ綿入れの準備しなくては

マリ わたし、カイマキ布団に包まっているのが幸せ

ムロウ あの部屋でかね

マリ ええ、わたしのお部屋

ムロウ うむ…

マリ え、なあに

ヨウコ ムロウさん、マリさんのお部屋のこと、夜も眠れないほ

どお悩みだそうよ

マリ まあ

ムロウ 誰がそんな話をしたのだね

ヨウコ さあ、どなたでしょう

ムロウ まあ、一人しかいないがね、そんなのは

マリ あら、ひどい言い方

ムロウ ひどいかね？

ヨウコ 怒られますよ、そんなのなんて言い方

ムロウ そうかね？

マリ ええ、アサコさんはハッキリものをおっしゃる方ですも

の

ムロウ うむ、やつぱり、アサコかね

マリ あら？

ヨウコ ひっかかったわ

ムロウ はっはっはっはっは

ヨウコ、ムロウにお茶を淹れる

マリ、むくれて見せる

ムロウ、楽しそうに二人の様子に目を細める

ムロウ ウチで会ったのが初めてだったろう

マリ なにかしら？

ムロウ ヨウコちゃんとは

マリ ええ

ムロウ つい、この間のことだ

マリ そうね

ヨウコ それが、なにか？

ムロウ いや、なにということでもないがね、すっかり朋友の如しだ

ヨウコ 意気投合

マリ 馬が合うのよ、わたしたち

ムロウ 結構結構、これでマリちゃん部屋のきれいになり、ヨウコがまともな靴下を履くようになれば言うことはない

ヨウコ あら、ひどい

マリ 靴下って？

ヨウコ んん、昔、父と一緒に軽井沢のムロウさんの別荘の近くにお邪魔していたとき、わたし女学校の靴下のまま自転車

漕いで御用に伺ったのね。そしたら、その恰好を窘められて……

ムロウ それ以来、ヨウコを見る度、どうしても靴下が気になるの

だよ

まあ

マリ ね、ひどいお話でしょ

ムロウ まあ、二人は子供の時分から知っているだけに、娘を見る

ようなものでね、わたしには

マリ あら、でも、わたしのパッパとムロウさんではずいぶんと違いますよ

おやおや

ムロウ パッパはいつでもきちんとした身なりをなさっていて、

わたしを膝にのせて「おマリは上等上等」とほめてくださったもの

ムロウ ああ、そうか、読んだ読んだ

ヨウコ マリさんのご本に書いてありましたね

マリ そうそう、ムロウさんならご存知かしらなに？

ヨウコ さっきのお話、パッパとあなたのお父様の

ああ、

ムロウ なんだね？萩原の話かい？

ヨウコ ええ、鷗外先生が、漱石先生のお葬式で父に会っていたんじゃないかって

ムロウ え、萩原がかね？

マリ そうなんです。ナツメさんのお葬式の時にね、受付にいらした若い方に名刺をお渡ししたんですって、とても凛々

しくて清々しい青年だったとおっしゃっていて、詩人の句いがしたって

ムロウ
ほう

色の黒い人だって

ヨウコ

そりや、萩原かもしれないが

ムロウ

やだ、ヨウコさん、日に灼けて精悍だって言ったのよ

マリ

あ、そうか、でも、精悍ってのは

ヨウコ

そりや、萩原と違うな

ムロウ

でしょ

マリ

でも、パツパは詩人の句いがすると

ムロウ

受付をしていたと言ったのかね？

マリ

え？あ、はい

ムロウ

ふむう、では、それはアクタガワくんだろう

マリ

え、あら、そう

ヨウコ

アクタガワさん？

ムロウ

そう、アクタガワリュウノスケくんか。

ヨウコ

まあ

ムロウ

漱石先生のお弟子だったしね。

マリ

アクタガワさんは、詩人の句いがなさった方？

ムロウ

そうだねえ、詩人の句い…うむ、アクタガワは、詩人であるがゆえに小説を書いた男かな？

ヨウコ

なんですって

マリ

よくわからないわ

ムロウ

ううん、そうだねえ、アクタガワ…背の高い男で、萩原とも一緒によく飯を食ったがね、二人はよく議論していた。

ヨウコ

詩の話も…そうそう、一緒に金沢に行った時かな、俳句の

話になってね、萩原が蕪村は芭蕉より面白いとか偉いとか言ったんだ、そしたらアクタガワは芭蕉の方が偉いと言った。そうしたら萩原が芭蕉は発句が観念的だと言いかえした。すると今度はアクタガワが、そんなことはない、この句はどうだ、ではこの句はどうだ、この句にも観念的

なところがあるかと立ちどころに六七句くらいの芭蕉の句を、覆いかぶせるように続けさまに読んで、まあ、そり

やあ猛々しく突つかかっていったよ。

ええ

詩は、どこかで、考えを諦めないと言葉が溢れてしまう。

アクタガワは諦められない性格だったからね。詩人だが、

詩は書けない。芸術的に身動き出来ないところまで自分を追い込む。だから、なのか、あんな死に方をしたのさ。

ヨウコ

では、ヨウコさんのお父様は？

ムロウ

ん？

マリ

萩原朔太郎さん。

ムロウ

萩原は、物語を背負うがゆえに詩を書いた。

ヨウコ

ええ、

ムロウ

諦めたり、怯えたり出来たのだ。いつでも自分を追い詰められた状況にしておいて、それで怯えたり、諦めたり、そんなことをさえ楽しんでいるように見えたよ。

ヨウコ

朔太郎は…

ムロウ

あ、いえ、父は、文学者としてどうでした？

ヨウコ

ん？

ムロウ、ヨウコを見つめる

君が書いた通りだと思う。

え？

君が、今「青い花」に書いている萩原が、私の萩原でもあるよ。

あれは、ただのわたしの思い出で…

あ、いやいや、君の書いている小説風な文章、あれが君のお父さんが書こうとしても書けなかったものなのだよ。

物語を背負うがゆえにね、みんな詩の中で使い果たしてしまつて、素直な心情を書き記そうとしてもだ、いつの間にか小難しい「絶望の逃走」になつてしまつたわけだよ。

じゃあ、白馬の王子と黒衣の王子と言つたところかしらなんだねそれは？

ヨウコさんのお父様とアクタガワさんは似ていらしたつてことでしょう、表面上はともかく。

ああ、なるほど…そうだね、銭の表と裏のようなどころは、確かにあつたかもしれないね。

ええ

マリちゃんは、もう一端の文筆家だ。物書きで身を立てていくことが出来るだろう。

そう？うれしい

ヨウコ、君は今、君のおやじが書き残したものを丹念に拾い上げ、貝殻箱に並べ始めたところだ。

はい。

ムロウ 書き続けなさい。書いた方がいい。積み残しにしていた気

持ちを、毎日書きなさい、急がなくていいから、ひとつの

場面ひとつの場面と、心の急所を抑えて書いていくとい
い。そうだな、書くほどに書けて、千枚にもなるかもしれないが…、しかし、本当の萩原は君にしか書けないだろう
からね。

ええ…

庭の方から自転車のブレーキの音

あら、こちらのお宅の王子のご帰還かしら

お、そうかね、あ、ヨウコ、さっきの今川焼を、まだあつたかいだろう

暗転

3. 金盞香

明転

1960

立冬すぎ。日没時。

小春日和のひと心地も日没とともに吹き始めた木枯らしが隙間風を差し
入れる

上手ソファにヨウコ、前掛けを外し腰掛けながら話し始める。

下手ソファにムロウ、いつもの和装でタバコをふかしている。

二人の前にはそれぞれ湯呑みとムロウに羊羹

ムロウ 少し小さいのだけどね、腹の方から甲羅を外して、身とね、味噌と、内子と外子を甲羅の中で混ぜて、それを器にしてそのままだか警沢でよ。

ヨウコ なんだか警沢ですね。

ムロウ まあ、百万石の城下町だからね。甲羅盛りというのだが：近江町市場あたりに行けば店先にカニが山積みになっている。

ヨウコ あら、すごい。それが、：コウバコガニ？でしたっけ
ムロウ セイコガニと読むのだよ。つづめてセコガニと言ったりもするが：松葉蟹のメスだ。この時期にしかとれないんでね。

ヨウコ あら、じゃあ貴重なものだったのかしら
ムロウ だが、萩原と来たら上の空で、それをポロポロとこぼしながら食うのだ。

ヨウコ ああ

ムロウ 酒もね、ずいぶん飲んだ。喧嘩もしたが：

ヨウコ そう言えば、ミヨシさんとは仲直り出来たのですか
ムロウ ん、ああ、私かね？

ヨウコ ええ

ムロウ いや、その節は失礼した。

ヨウコ まさか、自分の初めての本の出版記念会に、喧嘩中のお二人を同席させているなんて、ちっとも存じませんでした。あいつは何もないような顔をしていたがね。ま、そういう奴さ。

ヨウコ そうでもないようですよ
ムロウ ん？

ヨウコ ムロウに謝り損ねたから、今度一緒にムロウの家に行ってくれとおっしゃってましたけど

ムロウ そうかね、ではそれこそセイコガニの出番だなあ。来るときは言ってくれたまえよ。

ヨウコ ええ：なんだか嬉しそう。

ムロウ そうかね？

ヨウコ 喧嘩のいいところは、仲直りできる場所ですね。宇野さんが教えて下すったのですよ、喧嘩の事。

ムロウ 宇野千代かね

ヨウコ ええ

ムロウ 随分ぶりだったろう

ヨウコ そうですね。馬込にいた時分以来かしら。

ムロウ 「あんな小さかった子が」と言っていたよ。

ヨウコ はずかしい

ムロウ なんだね

ヨウコ いえ、体ばかり、大きくなってしまつて

ムロウ いや、そういうことではないよ。小さな子供だったのを知っているから、立派に成長すると自分の老いを思い知らされて狼狽えるのだ。

ヨウコ 宇野さんも？

ムロウ そうだろう

ヨウコ そうかしら

ムロウ 彼女など、自分の子がない分、余計そうなのかもしれないよ。そういう私だって、驚いた。

ヨウコ 蛆虫が蝶になったと書いていたみたい

ムロウ まあ、蛆虫はひどいな

ヨウコ そうでしょう

ムロウ せいぜい、芋虫毛虫くらいにするんだった

ヨウコ、思わず吹き出す

ムロウ ヨウコは、大丈夫そうだな

ヨウコ え？

ムロウ いや、せんのことさ

ヨウコ わかりません

ムロウ 出版記念会で言ったことだよ

ヨウコ ああ、「ヨウコちゃんか、小説家になろうかなるまいが、

私の知ったことではない」って、

ムロウ 思わず言ってしまったが

皆さん驚かれましたよ

ムロウ そうかね

ヨウコ 父の代理でと、仰っていらしたから

ムロウ ミヨシはニヤニヤと笑っていたよ

ヨウコ お二人とも人が悪いわ

ムロウ わたしは、君がお母さんのことを書いた部分がとくに良

いと言ったね

ヨウコ ええ、連載しているとき、お葉書いただきました。

ムロウ うむ、で本になってみると、その生き別れたお母さんと再

会した話に加えられていた。

ヨウコ ええ…

ムロウ 驚いたのだよ

ヨウコ …

わたしは君が、萩原を愛していて、稲子さんを恨んでいる、
そういう話を、エッセイを書いているのかと、そう思っ
ていたのだ。そうしたらどうだい、君は、お母さんに恋い焦
がれていた。

ヨウコ …

ムロウ そうだろう

ヨウコ 恨むなんて、出来ませんよ

ムロウ …

産んでくれた母ですもの

ムロウ しかし、再会は、期待していたものとは違ったね

ええ、でも、さっきのお話で少しわかりました。

ムロウ ん？

宇野さんの、

ムロウ ああ

母にとっても、この再会は期待とは違ったみたいですし、

とくに「萩原の血は争えない」って言われたりして、

なるほど

血ですって、血。なんて、いやな言葉。

うむ

母の血も、流れているんですけどね

ムロウ 上田稲子の血…もか

ヨウコ ええ

ムロウ 君は、それを受け容れようと

ヨウコ そこまでは、わからないですけど

ムロウ

ああ

ヨウコ

血…では書けませんし、でも、わだかまり…は、溶けていくような気がしています。

ムロウ

…うむ、だから、わたしは、ああいう言い方しかできなかつた。

ヨウコ

え？

ムロウ

君は、自分で考えたことを、そうやって言葉に出来る。私は、詩を捨てたがね、苦しみを書くのに疲れてしまつてね。しかし、君は最初から苦しみを詩のように言葉に出来る。お披露目の席で父親代わりは出来ても、文章を代わりに書くことは出来ん。君が萩原からもらつたのは、血筋などよりももっと大切な、例えば、父の言葉遣いとか、なにに怒るだとか、鼻のかみ方便所の入り方、美しいものを美しいと言える感性だとか、そういうものだろう。だから、萩原がそうであつたようにだ、君は、これから苦しみながらも、自分の言葉で書くことになるのだ。そう思つたら、言えることはああしかなかつた。知つたこつちやない。と

ヨウコ

ありがとうございます。

ムロウ

いや

ヨウコ

わたし、今、本当に嬉しいです。

ムロウ

そうかね

ヨウコ

ええ、ずつと、誰かに「お前は他にすることがある」って後ろから言われているような、そんな気がしていたんですけど、

ムロウ

うむ

ヨウコ

書かないわけにいかない

ムロウ

…

ヨウコ

今は、そう思っています。

ムロウ、羊羹を切り口へ運ぶ

ヨウコ、湯呑の茶を飲む、続いてムロウも飲む

ムロウ

では、書くものを見つけたのだね

ヨウコ

ええ、

ムロウ

なんだね

ヨウコ

まずは…母とのことを

ムロウ

そうかね

ヨウコ

まだ、書いていないことがあるんです。母と会つた時の事

ムロウ

それが、書かないわけにはいかないこと

ヨウコ

ええ、でも、そのことだけじゃないんです。

ムロウ

ふむ、それは／

ヤマギシ

○萩原くん、いるかね

勢いよく玄関を開けながらヤマギシ入場

ヤマギシ

お邪魔するよ。(ムロウに気付いて) お、これはムロウ先生

ムロウ

ヤマギシくん、酔っているのかね

ヤマギシ

酔つてはおりません。まあ、いささか飲んではおりますが、

はっはっは

ムロウ

女性の家を訪問するのに失敬ではないかな

ヤマギシ いや、仰る通り。これは一本取られました。しかし、しか

しですな、先生、これは喜ばずにおられないでしょう。

ムロウ なんのことだね

ヤマギシ これは人が悪い。萩原くんのことですよ。先生。

ヨウコ、コップに水を入れてヤマギシの前に差し出す

ヤマギシ

明治以来、わたし達文学者は、内面を語る言葉を探してきたのです。近代の自我を語る「日本語」を作ってきたと言つてもいい。坪内逍遙然り、二葉亭四迷然り、鷗外も、漱石も然り、透谷が、花袋が、藤村が、悩み苦しみ切り拓いてきた。片や、樋口一葉がおり、与謝野晶子がおり、平塚雷鳥がおり、野上弥生子から宮本百合子から…女流文学の系譜、系譜だ。そこに「青い花」から、萩原葉子が出た。日本エッセイストクラブ賞受賞。これは、これを喜ばずして、どうします。どうしますか、先生。

ムロウ うむ、まあ、喜ばしいことだよ。

ヤマギシ

そうでしょう。それが、あの萩原朔太郎の娘なのだ。日本語で、話し言葉で詩が書けることを証明し、そして完成させた、あの朔太郎の娘が、朔太郎のことを書いている、それも娘にしか知りえない詩人の秘密を、その私小説の代弁者として／

ヨウコ 代弁などしていません

ヤマギシ …なんだって

ヨウコ 父の、萩原朔太郎の代弁などしていません。

ヤマギシ よく…わからん、のだが

ヨウコ

わたしは、わたしのなかの父と父の周りの人との思い出を書いただけで、父の代わりに書いたものではありません。そうだろう。それは、そうだろう。しかし、君は気づいていないかもしれないが、君が書いた朔太郎像が、詩壇・文壇に与えた衝撃をだ。あの、病的なまでに微に入り細に入り、言葉の端々に拘る詩人の、言葉が産み出される背景というものを。

ヨウコ そんな

ヤマギシ ムロウ先生、あとがきにお書きになりましたな。

ムロウ なにをだね

ヤマギシ キツネがジャケツを着て、一流の音楽家に早変わりした

ようなもんだと

ムロウ あ、ああ、書いた。だが、あれは…

ヤマギシ いいではありませんか、

ムロウ なんだって

いいではありませんか、キツネでもムジナでも。知りたいのですよ、皆、大衆は望んでいるのです。あの、萩原朔太郎がどのような人物であったのか、どんな背景であの詩の数々を生み出したのか、娘が、文学者の娘が産まれ持った宿業を背負って書く。いいではありませんか。

ムロウ だがね、ヤマギシくん／

ヨウコ いいですよ。

ムロウ え

ヤマギシ そうかね

ヨウコ キツネでも、ムジナでも、いいです、なんでも。

ヤマギシ うむ

ヨウコ　でも、父に寄りかかるような仕事は、いたしません。

ムロウ　☆ほう

ヤマギシ　☆なんだったって

ヨウコ　萩原朔太郎のことを書くのはこれきりです。

ヤマギシ　仕事と言ったね。

ヨウコ　…ええ

ヤマギシ　仕事なら、書くべきではないかね、大衆の望むものを。

ヨウコ　大衆の望むもの…

ヤマギシ　そうだ、それが萩原朔太郎のことならば／＼

ヨウコ　もう、父のことで書くことはありません。

ヤマギシ　何を…何を言っているんだ、まだ、あるだろう、あるはずだ。書いていないことは。

ヨウコ　あつても、書きません。

ヤマギシ　幸田文も露伴のことを書いた。森茉莉だって鷗外のこと

を書いた。折に触れ、折に触れ、父のことを書いたら、い

いじゃないか。

ヨウコ　ええ、ええ、そうかもしれない。でも、今は、自分の書

かなくてはいけないことを、自分でなければ書けないこ

とを、書きたいんです。書いていないこと、向き合わなく

てはいけない私自身の事、そんなことを書かなくてははい

けないんです。その中で、父のことを書くかもしれない。でも、自分の足を食い続けて、しまいには胴体さえも食っ

てしまう蛸のように、そんな死なない蛸のように、父のこ

とを切り売りにするようなことは、そんなことはしたく

ありません。金輪際、いたしません。

…

ヤマギシ　いや、結構。では、君が足を食うことにしたその時、また、

萩原朔太郎の秘密を読ませてもらうでしょう。

ヨウコ、ヤマギシを正面から見つめる

ヨウコ、ヤマギシを正面から見つめる

ムロウ　そのうち、わたしもアサコに「父の秘密」なんて本を書か

れるかもしれない。

ヨウコとヤマギシ、目を合わせたまま

ヨウコとヤマギシ、目を合わせたまま

ヤマギシ　いいかね、君に、最初に書かせたのは俺だ

ヨウコ　ええ、ヤマギシ先生のおかげだと思っています。

ヤマギシ　しかし、書いたのは君自身だ。

ヨウコ　書かなくてはいけないものがあると聞いたね。

ヨウコ　ええ

ヤマギシ　テーゼ、命題というやつだ。それがなんだか、今の俺には

皆目見当もつかない。萩原朔太郎のこと以上に書かなく

てはならないことが何なのか。楽しみにしているよ。君が、

今、どんなつもりか知らん。吉屋信子のつもりか、平林た

い子のつもりか、それとも宇野千代なのか…ああ、そう言

えば、宇野千代とは昔、落合の「ワゴン」で顔を合わせた

な。

ワゴン？

ヤマギシ　ダザイやダンカズオと一緒にいった。林芙美子や宇野千

代は常連だったよ。

代は常連だったよ。

代は常連だったよ。

ヨウコ それは…

ヤマギシ 「ワゴン」のママは有名な美人でな、文人の女客の相談相手になつていた。ダンスがうまくて、若い文士などは、ママと踊りたがつたものだ。名前は、上田稲子。

ヨウコ

！

ヤマギシ 君は母親のことも、宇野千代のことも書いたじやあないか、聞かなかつたのかね、母親のことを、それとも君には話せないことを…

ヨウコ、ヤマギシの頭にコップの水をかける

ムロウ、一瞬腰を浮かせる

ヤマギシ

…

ムロウ

…ヨウコっ

ヤマギシ、声を上げて笑い出す

笑い声は次の笑い声呼び、次第に大きく大袈裟になる

笑いながら、ヤマギシ去る

ヤマギシ

●萩原くん、いつか見せてもらうよ、君のダンスをね。楽しみにしている。

笑い声、次第に遠くなる

ムロウ

ヨウコ…

ヨウコ

踊りませんよ

ムロウ

なんだって？

ヨウコ

誰かに踊れと言われて、踊ったりなんかしません。

窓の外に沈んでいく夕陽が乱反射して金色の光の壁を描き出す

その光は、ヨウコの顔を照らし出し、強いコントラストでムロウを陰にしていく

それはスポットライトではない。

ヨウコ

踊らない。わたしはまだ踊らない。どんな舞台が準備されていても、誰かの掌の上では、踊らない。

踊るときは…自分で踊るわ。自分の足で踊ってみせる。

陽が完全に沈み、マジックアワー。明かりを灯さない部屋の中はゆっくり闇に溶けていく

ヨウコ

ムロウさん、実はわたし、ムロウさんと同郷なんですよ

ムロウ

なんだって

ヨウコ

わたし、赤門で産まれたのですもの、加賀前田候のお屋敷よ

終り

原作

『父・萩原朔太郎』 萩原葉子 著 1959 筑摩書房

参考文献

- 『蕁麻の家』 萩原葉子 著 1997 講談社文芸文庫版
『蕁麻の家 三部作』 萩原葉子 著 1998 新潮社
『花笑み・天上の花』 萩原葉子 著 1980 新潮文庫版
『朔太郎とおだまきの花』 萩原葉子 著 2005 新潮社
『死んだら何を書いてもいいわ』 萩原朔美 著 2008 新潮社
『特別企画展 小説家・萩原葉子展図録』 2000 前橋文学館
『小説家の俳句』 萩原朔太郎 著 1938 青空文庫收藏
『芥川龍之介の死』 萩原朔太郎 著 1927 青空文庫收藏
『出来上がった人』 芥川龍之介 著 1977 青空文庫收藏
『犀星隨筆集「憶芥川龍之介君」』 室生犀星 著 1935 三笠書房
『萩原朔太郎』 三好達治 著 2006 講談社文芸文庫版
『杏っ子』 室生犀星 著 1957 新潮社
『父の帽子』 森茉莉 著 1957 筑摩書房
『紅茶と薔薇の日々』 森茉莉 著 早川茉莉 編 2016 ちくま文庫
『贅沢貧乏』 森茉莉 著 1992 講談社文芸文庫版
『暮らしの手帖「とわたし」』 大橋鎮子 2010 暮らしの手帖社
『歌舞伎への招待』 戸板康一 著 1951 暮らしの手帖社
『人間キリスト記』 山岸外史 著 2013 柏艷舎
『人間太宰治』 山岸外史 著 1989 ちくま文庫版
『新日本文学の60年』 鎌田慧 編 2005 七つ森書館
『父犀星の秘密』 室生朝子 著 1980 毎日新聞社

『森茉莉 総特集』 KAWADE 夢ムック文藝別冊 2003 河出書房新社
『坊っちゃん』の時代』 関口夏央・谷口シロー 著 1987-1997 双葉社

『生きて行く私』 宇野千代 著 1983 毎日新聞社

『日本文学盛衰史』 高橋源一郎 著 2004 講談社文庫版

『日本文学盛衰史』 平田オリザ 著 2018 上演台本

など

Webサイト

松岡正剛千夜千冊 <https://1000ya.isis.ne.jp/>

カトリ株式会社 ヘッドの歴史

https://www.katori-interior.co.jp/bed%20History/bed_history_1.htm

日本民主主義文学会 <http://www.minsyubungaku.org/>

落合学 (落合同人) 萩原稲子が下落合にやっつへるまで。気にな
る下落合

<https://chihchiko.blog.ss-blog.jp/2013-04-13>

他 NHKアーカイブ、Wikipedia など参照

取材協力 (順不同・敬称略)

萩原朔美、萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち前橋文学館、松竹株
式会社、公益財団法人日本俳優協会、中村ひろみ

上演に関するお問い合わせ

演劇／微熱少年 engekinetsushoumen@gmail.com

上演の記録

前橋文学館リーディングシアターVol.13

『わたしはまだ踊らない』

2020年9月20日(日) 前橋文学館ホール 無観客上演収録

前橋文学館特別企画展

「なぜ踊らないのー生誕100年記念 萩原葉子展」

2020年10月10日(土) ～2021年1月11日(月・祝)

展示会場にて上映

【作・演出】

加藤真史(演劇/微熱少年)

【出演】

ヨウコ (萩原葉子) 萩原玲子

ヤマギシ (山岸外史) 林 健樹

マリ (森 茉莉) 雨宮友美

ムロウ (室生犀星) 萩原朔美

ナレーター 高橋幸良

【スタッフ】

音楽…荒木聡志(劇団灰ホトラ)

照明・装置…高橋 弘

撮影・編集…岡安賢一(株あかつま)縁屋

展示担当…新井ゆかり

制作…岩佐映子、福田貴之

【企画・制作】

萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち前橋文学館